塗料で環境負荷低減
三州ペイント

サンネオシリーズを新発売

塗料で省エネを実現―。三州ペイント（福岡市博多区、八藤丸敬子社長、092・431・0034）は、住宅用塗料「サンネオシリーズ」を7月から新たにラインアップに加える。

遮熱効果を高めた屋根用塗料「ヒーテクト」は、屋根材表面の温度上昇を10―20度C抑える。冷房使用量を削減できるため、夏期の節電に貢献する。住宅だけでなく工場などの省エネにも活用可能だ。

また壁用塗料「ウォーレスト　ハイブリッド」は、無機系塗料と有機系塗料のメリットを組み合わせた新しいジャンルの製品。耐久性に優れるため、一戸建て住宅のライフサイクルコスト低減に寄与する。

サンネオシリーズは省エネや環境負荷低減など、近年の環境意識の高まりに塗料の側面からアプローチする。住宅リフォームに特化し、塗料の開発・製造から施工までを行うメーカーとして、環境への貢献を目指す。

アジアの玄関、福岡・博多で創業。設立20周年を迎えた

屋根表面の温度上昇を20℃抑制―ヒーテクト

夏場の電力不足の懸念があるなかで、家庭での省エネ機運も高まっている。「サンネオシリーズ　ヒーテクト」は冷房使用量を低減することで、節電を図ることができる商品だ。同製品は屋根用の高耐候性遮熱塗料。屋根に塗布することで、太陽光に含まれる赤外線による屋根の過熱を抑える。

屋根は日光に直接さらされるため、夏場の室内温度上昇への影響も大きい。ヒーテクトは瓦など屋根材表面の温度上昇を、遮熱加工しない場合に比べて10―20度C低減する効果がある。「市場に現在ある製品よりも、低減効果をさらに5度C向上させた」と、八藤丸貴実総括取締役は力を込める。

高い低減効果の背景には、同社が「ダブル遮熱」と呼ぶ工法の実現がある。下塗りと上塗りの二重塗装で熱をさえぎる方法で、新たに下塗り用塗料を開発することで同工法が生まれた。

通常、塗料は色などの効果を出す上塗りと、それを屋根や壁などに定着させるために塗布する下塗りで構成される。これまで上塗り用の屋根用遮熱塗料はあったが、下塗り用はなかった。同社は下塗りの重要性に着目。上塗りだけでは反射しきれなかった赤外線を、下塗りでもダブルで反射することで効果を高めた。

環境負荷低減を目的とした省エネ意識の高まりで、住宅の節電に取り組む動きが加速している。エコ家電や太陽光発電の導入など、電力使用量の効率化は大きなポイントだ。同時に電力量だけでなく、高通気性や遮熱効果を高めた窓ガラスなど、部屋自体の温度をさげる動きも活発だ。そのなかでヒーテクトは、屋根の遮熱で省エネ効果を高める。

また高い遮熱効果だけではなく、耐久性も併せ持つ。塗料の期待耐用年数は10年を誇る。屋根の保護効果も有するため家が長持ちし、より広い意味での省エネになる。カラーベスト、モニエルや金属系の各種屋根に対応する下塗り用5種に加え、上塗り用2種をそろえる。住宅以外の屋根にも適用できるため、シビアな節電対策が求められる企業にとっても期待の製品だ。

外壁塗料の新ジャンル「無機フッ素」―ウォーレスト

外壁塗料「ウォーレスト　ハイブリッド　トップ」は、八藤丸総括取締役が「実用性と色へのこだわりを両立できる塗料」と、胸を張ってすすめる製品だ。最大の特徴は“ハイブリッド”。無機・有機系の塗料の利点を一つにまとめて、耐候性と柔軟性のどちらも有する新ジャンル「無機フッ素」を生んだ。住宅リフォームをさらに効果的にする製品だ。

外壁用塗料に求められるのは色の美しさに加えて、家を守るという大きな役割。ウォーレストは「ウォール（壁）」に、英語の最上級を意味する「エスト」を組み合わせた「壁の最上級」を目指して開発された。

塗料は無機系と有機系に大別される。無機系塗料は耐候性、低汚染性、高硬度、難燃性に優れ長持ちするものの、もろさが弱点。一方の有機系塗料は雨風への耐久性が弱い反面、柔軟でひび割れに強いため性質としては外壁用に向いている。

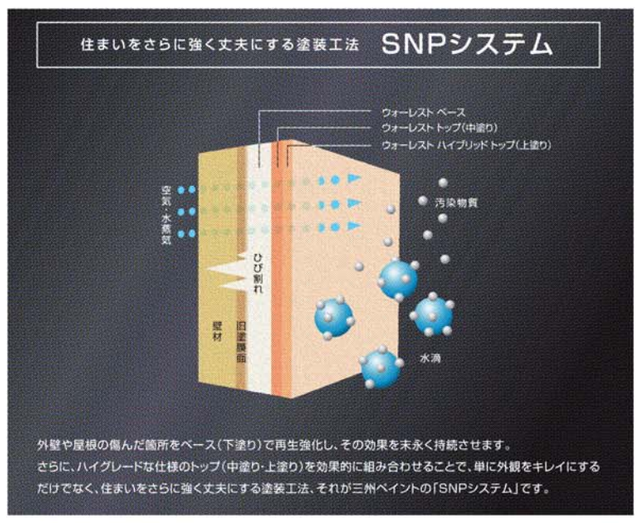
これまで外壁用塗料ではフッ素塗料の有用性が最も高いとされてきた。だが同社は両者の利点を組み合わせて、それぞれの強みを高め、弱点を克服した。「フッ素を超えた」（八藤丸総括取締役）新型塗料だ。

フッ素樹脂塗料は期待耐用年数が比較的長い15年程度だが、ウォーレスト　ハイブリッドは20年に伸ばした。またフッ素塗料は施工後に時間が経つと汚れが付きやすい難点があり、コスト面でも他の塗料に比べて割高だった。同製品はその点も克服し、「最上級」の外壁塗料を提供する。

リフォーム物件には、新築物件と異なる難しさがある。年月の経過や天候の影響は、外壁材にダメージを与える。また家の状態は築年数や地域によって千差万別だ。そのため外壁塗装は壁材などへ下塗りを施す、「下地剤」の役割が大きくなる。

同社は下地剤を「まず新築の状態に戻すもの」（同）と捉えて、家の状態を回復させる下地剤の開発に取り組んできた。表面を塗り替えるだけではなく、異なる素材や多種多様な状態に合った塗料で、新築のような状態に「再生」する。そして上塗り剤・ウォーレスト　ハイブリッドを塗装することで、見た目だけでなく、補修もふくめたリフォームが完成する。

下塗りは各種下地に対応する6種類。耐久性や用途に対応する上塗り5種類がある。ニーズや好みに応じて選べる、豊富な標準色をそろえる。



下塗りの機能を高め、壁を“再生”する

開発から施工まで自社一貫

三州ペイントは11年5月で設立20年を迎えた。福岡市博多区の本社ビルは、3月に全線開業した九州新幹線の始発駅・博多駅にも近い。創業地である福岡・博多にはこだわりがある。「日本がより国際化していくなかで、アジアの玄関である福岡に本社を構えていることは重要だ」と八藤丸総括取締役は力を込める。

同社は設立当初からリフォームがメーンで、ノウハウの蓄積と10万棟以上の施工実績が強みだ。設立当時はバブル末期。古いものは壊して新しいものを建てるという風潮で、住宅の寿命は短かった。一方でヨーロッパを中心とする欧米文化圏では、古いが手入れをして長く使われている住宅ほど価値が高い。日本とはまったく価値観が逆だった。

だが日本でも09年に長期優良住宅法が施行されるなど、リフォームや長持ちする家への関心が高まってきた。「建てては壊し、また建てる」というサイクルから脱却し、建てた住宅を長持ちさせることが、環境に貢献するとの考え方で同社は全国展開してきた。

20年で10万棟以上の実績

こだわるのは塗料の開発から販売、施工までを自社で一貫して責任を持つ点だ。「素材が良くても、職人の腕で結果は変わってくる」（同）ため、一貫体制でのサービス提供にこだわる。塗装はすべて手塗りだ。東北から九州まで19支店のネットワークも重要なポイント。地域によっても異なる気候の影響は、住宅にとって大きく、各地で積み重ねてきたノウハウが信頼につながる。

製品開発はグループ企業の三州化学（福岡市博多区）が行う。顧客からの声やリフォーム実績を商品開発へフィードバック。ポリマー樹脂を用いた工法は「当社が元祖」（八藤丸総括取締役）と胸を張る現在の主力商品だ。また光触媒や無光触媒などの研究や、米デュポンとの製品開発実績を持つ。常に最先端のペイントリフォームを目指した製品提供に汗をかく。

「リフォームの良しあしが本当にわかるには長い時間がかかる。それだけに信用をこつこつつくるしかない」と八藤丸総括取締役は力を込める。また「新製品発売にあわせた『スマイアップキャンペーン』で、より多くの方に当社の製品とサービスの良さを知ってほしい」と意気込む。

“責任施工”で顧客と信頼を築く